

児童期の自己愛傾向と自尊心が学業達成に及ぼす影響

(中間報告)

滋賀文教短期大学子ども学科* 加藤 仁

The effects of narcissism and self-esteem in childhood on the academic performance

Shiga Bunkyo Junior College, KATO, Jin

要 約

学業パフォーマンスに影響を与える競争と協同について、そのいずれが個人のパフォーマンスを高めるかについての検討は十分でない。本研究では自己愛傾向と自尊心をそれぞれ「競争と協同」を表す心理傾向として位置づけ、児童期のパーソナリティに基づく心理傾向が競争・協同意識を通じて学業達成に及ぼす影響プロセスについて検討する。研究 1 では児童期の心理傾向および競争・協同意識が学業成績に及ぼす影響を、研究 2 では研究 1 に加えて児童期の家庭環境が高等教育への進学という学業達成に及ぼす影響を検討することで、学業達成に及ぼす心理傾向の影響プロセスを明らかにする。また、競争意識と協同意識を個人の心理傾向から予測することで、自尊心を涵養する教育や家庭での関わりなどの介入的アプローチの方策についても議論する。

【キー・ワード】 自己愛傾向, 自尊心, 競争と協同, 学業達成

Abstract

In terms of competition and cooperation affecting the academic performance, little is known about which of them will enhance the performance. In this study, narcissism and self-esteem are regarded as a psychological tendency expressing competition and cooperation respectively, and the process which the two psychological tendency based on childhood personality enhances the academic achievement through competition / cooperative consciousness is examined. In Study 1, the influence of competition / cooperative consciousness based on childhood psychological tendency on the academic performance will be examined. In Study 2, the influence of the environment at the childhood on the academic achievement will be examined in order to clarify the process of the two psychological tendency at the childhood affecting on the academic achievement. Moreover, the interventional approach such as home / school education to cultivate self-esteem will discussed.

* 現所属：北陸学院大学 人間総合学部

【Key words】 Narcissism, Self-esteem, Competition and Cooperation, Academic Achievement

問題と目的

児童期の学業達成における一つの要因として「競争と協同」の意識がある。国際学力調査を見ても、他者と比較し切磋琢磨する競争意識を強くもつ国が上位にランクインする一方で、周囲のサポートを引き出し効率よく学業を進める協同意識をもつ国も上位にランクインしている (e.g., OECD, 2016)。こうした学業パフォーマンスに影響を与える競争と協同について個人の心理傾向に基づく個人差が存在することが明らかとなっている一方で、競争と協同のいずれが個人のパフォーマンスを高めるかについての議論は十分でない (e.g., Twenge & Campbell, 2009)。

心理的要因としてはそれぞれ自己愛傾向と自尊心が代表的なものとして想定され、従来は実験室状況における課題パフォーマンスを高める個人差要因として検討されてきた。自己愛傾向とは、自己誇大感や有能感、高い賞賛欲求に特徴づけられる個人のパーソナリティ特性であり (Raskin & Hall, 1979)、他者との比較に基づいて自尊心を維持・高揚しようとする自己概念である (Baumeister, Campbell, Krueger, & Vohs, 2003)。一方、自尊心は自己に対する全般的肯定的な感覚であり (Rosenberg, 1965)、社会的受容のバロメーターとして機能する (Leary & Baumeister, 2000)。また、自尊心には社会的受容のバロメーターとしての機能だけでなく、社会的地位追求の機能も仮定されている (Gebauer, Sedikides, Wagner, Bleidorn, Rentfrow, Potter, & Gosling, 2015)。自己愛傾向の高さが社会的地位追求の傾向と関連している (Leary, Jongman-Sereno, & Diebels, 2014) ことを考慮すると、自己愛傾向と自尊心は社会的地位追求の点では共通している一方で、社会的受容の点においては自尊心のみが関連を示すと考えられる。したがって、本研究では自己愛傾向と自尊心をそれぞれ「競争と協同」を表す心理傾向として位置づけ、下記の検討を行う。

本研究では、児童期のパーソナリティに基づく心理傾向が、競争・協同意識を通じて学業達成に及ぼす影響プロセスについて、いずれの意識が学業達成を予測するのか検討する。研究 1 では児童期の心理傾向および競争・協同意識が学業成績に及ぼす影響を、研究 2 では研究 1 に加えて児童期の家庭環境が高等教育への進学という学業達成に及ぼす影響を検討することで、学業達成に及ぼす心理傾向の影響プロセスを明らかにする。なお、学業達成に関わる要因は数多くあるが、本研究では一般パーソナリティである Big Five を統計的に統制することで、自己愛傾向および自尊心に代表される心理傾向の影響を詳細に検討する。また、競争意識と協同意識を個人の心理傾向から予測することで、自尊心を涵養する教育や家庭での関わりなどの介入的アプローチの方策についても議論する。

方 法 (予定)

調査参加者

研究 1 : 滋賀県内の小学校 4 年生から 6 年生の児童 (計 300 名を予定)

滋賀県内の小学校に協力を依頼し、4 年生から 6 年生の児童を対象に質問紙調査に参加してもらう。

研究 2：世界中の 18 歳以上の子どもを持つ保護者（計 1,000 名を予定）

クラウド・ソーシング・サービス（Figure Eight）を通じて全世界から研究参加者を募集し、オンライン調査に参加してもらう。

質問紙構成

研究 1：児童期の心理傾向が学業成績に及ぼす影響

児童の心理傾向（自己愛傾向、自尊心）、社会的価値志向性、社会的ネットワーク（友人数、助けてくれる友人数）、学業への取り組み姿勢（学習への動機づけ、家庭での学習時間、学業に対する自信、学習方略）、前学期末時点で成果が得られたと思う教科数（主要 4 教科と英語）を測定し、自己愛傾向および自尊心に基づく競争意識と協同意識が学業達成に及ぼす影響を検討する。

質問紙では、(a) 個人属性、(b) 自己愛傾向、(c) 自尊心、(d) 社会的価値志向性、(e) 社会的ネットワーク、(f) 学業への取り組み姿勢、(g) 学業達成について尋ねる。回答時間は 15 分程度である。調査終了後に、研究協力者を通じて、調査参加者に対して研究の目的に関するデブリーフィングを行う。

研究 2：親子の心理傾向が学業達成に及ぼす影響

親子それぞれの心理傾向（児童期時点／親の自己愛傾向、自尊心、Big Five）、教育歴（高等教育以上かどうか）、社会的価値志向性、社会的ネットワーク、学習環境、学習状況、学業への取り組み姿勢を測定する。分析では、児童期時点での心理傾向および家庭環境が高等教育機関への進学を予測するかどうかを検討する。

質問紙では、(a) サティスファイス項目、(b) 個人属性、(c) 自己愛傾向、(d) 自尊心、(e) Big Five、(f) 社会的価値志向性、(g) 社会的ネットワーク、(h) 学習環境（家庭教育資源）、(i) 学習状況（学習支援行動、教育的関与）、(j) 学業への取り組み姿勢（学習への動機づけ、家庭での学習時間、学業に対する自信、学習方略）について尋ねる。回答時間は 20 分程度である。最後に、調査参加者に対して研究の結果に関して質問を受け付けるためのメールアドレスを伝える。なお、(a) から (g) については親子それぞれについて尋ね、(h) から (i) については親に子どもの児童期時点を想起してもらい回答を求める。

現在の進捗状況

現在の進捗状況としては、研究 1 および研究 2 について所属機関の研究倫理審査委員会にて承認を得た段階である。今後は、2019 年 1 月から 2 月にかけて研究 1 を、2 月から 3 月にかけて研究 2 の調査を実施し、データ収集後の 3 月以降に分析および論文執筆を行う予定である。

引用文献

Baumeister, R. F., Campbell, J. D., Krueger, J. I., & Vohs, K. D. (2003). Does high self-esteem

- cause better performance, interpersonal success, happiness, or healthier lifestyles? *Psychological Science in the Public Interest*, 4(1), 1-44.
- Gebauer, J. E., Sedikides, C., Wagner, J., Bleidorn, W., Rentfrow, P. J., Potter, J., & Gosling, S. D. (2015). Cultural norm fulfillment, interpersonal belonging, or getting ahead? A large-scale cross-cultural test of three perspectives on the function of self-esteem. *Journal of Personality and Social Psychology*, 109(3), 526.
- Leary, M. R., & Baumeister, R. F. (2000). The nature and function of self-esteem: Sociometer theory. In *Advances in Experimental Social Psychology* (Vol. 32, pp. 1-62). Academic Press.
- Leary, M. R., Jongman-Sereno, K. P., & Diebels, K. J. (2014). The pursuit of status: A self-presentational perspective on the quest for social value. In *The psychology of social status* (pp. 159-178). Springer, New York, NY.
- Organisation for Economic Co-operation and Development (OECD). (2016). *PISA 2015 results in focus*. Paris.
- Raskin, R. N., & Hall, C. S. (1979). A narcissistic personality inventory. *Psychological Reports*, 45(2), 590.
- Rosenberg (1965). *Society and the adolescent self-image*. Princeton University Press.
- Twenge, J. M., & Campbell, W. K. (2009). *The narcissism epidemic: Living in the age of entitlement*. Simon and Schuster.